

# 手塚治虫を語る

## —「手塚治虫展」記念講演

松 谷 孝 征

ただ今ご紹介いただきました、手塚プロダクションの松谷です。本日、皆さんの前で講演することは、私にとって大変光栄なことです。そして本日から平和ミュージアムの方で手塚治虫展がおこなわれます。もし手塚治虫が生きていたら、本当に喜んだと思います。立命館大学が平和ミュージアムをつくられたのは、9年前です。手塚自身が創作にかりたてられた大きな要因の1つは、手塚が第二次大戦中に少年期、青年期を過ごしたことにあります。終戦後すぐに漫画を描き始めたわけですが、自身の第二次大戦の悲惨な体験が大きな原動力になっています。まず平和が如何に大切か、如何に戦争が悲惨か、命がかけがえのないものであることを、若い人たち、もっと若い人たち、未来の子どもたちに、是非伝えたいという一心で漫画を描いてきました。そういった意味でこの平和ミュージアムで手塚治虫展が開かれることは、本当に手塚にとっても、われわれにとってもうれしいことです。是非お時間がありましたら見ていただければと思います。

今日は手塚治虫の話をします。ミュージアムに行きますと、前と後ろの壁に「火の鳥」があります。手塚の作品の「火の鳥」が素晴らしい形で壁に描かれております。過去と未来を象徴した形で、その真ん中のホールに立っているわれわれが現在であることを表現しているそうです。先ほど紹介していただいた吉村和真さんが、あれは金と銀でできているから金閣寺と銀閣寺の象徴ではないかと思ったというお話をしていましたけれども、そうではなくて過去と未来です。「火の鳥」は過去未来過去未来と描いていきまして、手塚は最後に現代を描いて終わらせよう、それは自分が絶筆をする時であるということでした。「火の鳥」を読んでいない方にはわからないと思うのですが、手塚からの話では、狂言回し、火の鳥と、それから我王とか猿田彦とか鼻の大きな人が出てきます。輪廻転生を扱っていますから、そのキャラクターはいつも登場します。最後は鼻が大きいからアトムのお茶の水博士の時代で、その時代で「火の鳥」を完結すると言っていました。本心かどうかわかりませんが、「鉄腕アトム」の

本の中で、アトムは2003年の4月7日に生まれたことになっていますから、2003年ぐらいまでは描くつもりでいたのでしょう。けれども、今から10年ほど前に本当に若かったのですが、60歳で亡くなりました。大変残念です。

手塚は1928年生まれです。ですから今生きていると72歳ぐらいです。換算していきますと、第二次世界大戦中に少年期で、終戦が1945年ですから、17歳の時に終戦を迎えています。本当に多感な時期にひどい戦争にあい、空襲にも見舞われました。宝塚で育ちましたが、その時は学徒動員で大阪に行っていました。大阪で大変な空襲にあって、見るも無残な黒焦げの死体が周りにごろごろあったそうです。それを見て、戦争の悲惨さ、命の尊さを感じたのだと思います。8月15日を迎えた時に、「これで漫画が描けるぞ」と本当に快哉を叫んだそうです。戦時中もこつこつと漫画を描いていました。戦時中は、漫画自体が不道徳であることに加えて、机に向かって漫画を描いているだけで非国民扱いされました。それでこつこつと描き溜めたものが、わずか17歳をまえにして3000ページから4000ページもありました。ものすごい分量をその時描いていました。今の皆さんのような、時間がたっぷりあるわけではなく、空襲で逃げるとか、学徒動員で見張られながら仕事をするとか、そういう状況の中で、それだけのものを描いていたことは、素晴らしいというか、凄まじい漫画好きの少年だったということになります。

手塚は戦後すぐに17歳で漫画家としてデビューしました。翌年の1946年の正月から『少国民新聞』（『毎日小学生新聞』の前身の新聞です）に4コマ漫画を描き始めます。それがスタートです。皆さんもよくご存知と思いますが、今の少年漫画雑誌の主流は週刊誌です。週刊誌で漫画をずっと描き続けるのは、ものすごく大変で過酷なことです。当時デビューしてからすぐに月刊誌で他の漫画家と競争しながら描くわけです。もちろん商業誌ですので、人気があればすぐ切られます。ましてやそのあと週刊誌ができて、たくさんの分量を描かなくてはいけない状況の中で、いつも面白くてい

い作品を描かなければいけないのです。そうでないとすぐに切られてしまいますから、自分が描きたいものでも自由勝手には描けなくなります。だからといってその時期の子どもたちに迎合するものを描いていたら、それでは自分が何のために漫画を描いているのか、わからなくなります。どうしてもそこに自分のメッセージを込めながら、漫画を描くことをしなければいけないのです。

私は1944年生まれです。1952年から描き始められました「鉄腕アトム」は子ども時代から、ほとんど見ていたわけです。私がアトムを読んでいたのは『少年』という月刊雑誌ですけれども、『少年』を読む時、一番最後にアトムを読みました。もっと面白いものがいっぱいありました。それらの作品を先に読むのです。手塚作品以外でもたくさん面白い人気漫画がありました。でも、今単行本になって売れているものは何か。私たちが喜んで好んで読んだ、そして当時の子どもたちに支持された多くの作品はなかなか見かけません。ところが手塚治虫の漫画はいまだに売られています。これは何故か。やはり手塚が一生懸命、そこに手を変え品を変えて、命の大切さを吹き込んだ、普遍的なテーマを盛り込んでいたからという気がします。そしてなおかつ面白く見せた。そこが天才の由縁なのですから。

手塚は生涯、展覧会を見ればわかりますが、15万ページ描きました。私は手塚と17年間付き合いました。会社の同僚だと、朝から夕方まで付き合っただけで帰りますから、たいした付き合いではありません。手塚との17年間の付き合いは、1日24時間全てです。家へ帰れないのです。会社に出てくると一週間にせいぜい帰って2回、下手をすれば一週間帰れません。本人が、ボスが帰らないから帰れるわけがない。しょうがないからずっといます。こういった形ですっかり、奥さんに嫉妬されるくらい17年間一緒にいました。15万ページというと、40年間で割ると1日平均10ページ描くことになります。毎日あのコマのあるページを、10ページ平均して描かなくてははいけません。今の週刊誌の先生方の中には、20ページの連載を一本描くのに一週間、下手をすれば8日間かかる漫画家もいます。20ページで8日間かかるようなものを、毎日10ページ描くのです。もちろんテレビにも出なければいけないし、出張も、講演もあります。またお付き合いや、時には風邪もひくでしょう。そんなことを考えると、とてつもない分量です。なおかつアニメーション作品を60タイトル以上も創っています。本当に想像すらできない分量です。

天才とってかたづけてもしょうがないのですが、まさに天才ではないかと思えます。

天才のいわれは、展覧会を見ていただければ、その一端がわかりますが、例をあげてみましょう。手塚は晩年に「聖書物語」といって、旧約聖書を26本のテレビシリーズにしました。26本にまとめる時に、イタリアのライという国営放送のひとと、日本テレビのひとと、われわれがいましたが、手塚はその場でパーッと書くのです。創世記、アダムとイブから始まって、ノアの箱舟、モーゼと、ものの見事に26に分けました。

もう1つ感心したことは、日本の歴史を漫画にしているのはずいぶんありまして、ヒットシリーズになっていましたが、世界の歴史を手塚さんが監修してやってくれないかという話がありました。世界の歴史で、過去から現在までさまざまな事件やことがら起きたわけで、「産業革命があるだろう」、「四大文明発祥があるでしょう」、「アメリカ大陸の問題があるでしょう」と、どうしたらいいかと、われわれと編集者が頭を悩まし、途方にくれていた時、彼はあつという間に、各大陸に分けて、あらゆる事件や事象を盛り込んで、ものの見事に全15巻のタイトルを全部出してしまうのです。彼の頭はどういう風になっているのかなと、私もびっくりしました。まさに天才としか言いようがないと思えます。

また、編集者が何かものを言ったり、書いたりしている中で、「手塚の遅虫」と言われます。原稿を遅れてばかり、ぎりぎりになっても渡せない、普通の人が終わった2日後くらいにようやく渡す、週刊誌が貨車を用意しているのにその貨車に雑誌が乗らなかったとか、大変な迷惑をかけながら平気で遅れました。ですから手塚治虫は原稿が遅いと、錯覚する人がいるのですが、本当は無茶苦茶早いのです。

「ブラック・ジャック」という作品がありますが、20ページで1話完結の話です。20ページで1話完結を毎週毎週描けるような人は、漫画家にほとんどいません。ちゃんと20ページでお話をまとめて、感動させるようなものを作るのはとても難しいのです。それを毎回毎回20ページの読み切りを描いていました。ある時やはり締め切りがとうに過ぎていた時に、19ページぐらいまでほとんどあがって、最後の1ページが描けない。そんな時にわれわれに「これどうですか、面白いですか」と言うのです。というのは本人は気に入らないからです。気に入っていないから、何とか描き直したいけれども、いまさら時間をくれとは言えない状況です。私や編集者に聞いたら、すぐに貰いたいから、「面

白いですよ」と言います。貰わないと、穴があきます。私は立場上、「これはいいじゃないですか」とかいう風な返事をすぐしますが、手塚は顔色を読み取ります。あまり面白くないけれども、仕方なしに返事をしていくことが手塚にはわかってしまいます。人手が足りなくて外部から呼んだアシスタントにも読ませます。するとその人は正直に、「これはいまいちですね」と、ためらいもなく言ってしまう。私は、「この野郎め」と思います。案の定、夜中の12時頃に、明日の朝にはもう持っていけないといけなく、夜中印刷機を待機させ、2時でも、3時でも、4時でも入ったら、すぐにでも印刷するような状況になっているのですけれども、「明日の朝8時まで時間ください、描き直します」と言い出します。あと7、8時間しかないのに、20ページを案から始めて全部描きあげるなんて、信じられるわけありません。とてもではないけどだめだと編集者は思います。その時の担当の編集者は、立命館出身の方でした。この人は、本当によくがんばった人で、「ブラック・ジャック」の大半を取った人です。この人に頼んでもかわいそうですから、編集長の自宅に私が電話して頼みました。この編集長は、この前亡くなりましたが、漫画の編集界では名物中の名物の乱暴な人でした。手塚が具合が悪いから病院へ行くとすると、「病院なんか行くな。病院なんかに行けば、悪いところが見つかるに決まっている。そんな所に行くものではない」と言うような人でした。そこで「何とかお願いします」と言うと、編集長は酔っ払っていて、「勝手にしろ」と電話を切りました。けれども手塚は、ものの見事にその翌朝の8時までに、新たな話を20ページ描きました。それほど作品に対する執着、真剣さはものすごいのです。世間では遅虫と言われているけれども、本当は原稿が無茶苦茶早いのです。その編集長は手塚との長い付き合いの中で一番手塚をよく知っていたのです。

逆さまに描いたりできる芸達者です。もし手塚がここで講演すると、絵を描きながら講演しますから、皆さん飽きずに聞けます。私みたいに、ただおしゃべりするだけではなかなか辛いのですが、手塚は本当に上手です。テレビに出ても、漫画論からあらゆる芸術論まで、精通していました。漫画のことだったら、どこへでも出かけました。自分でないとだめだという自負心、自信がありました。ここに来られているような方はそうでないと思いますが、大体世の中の大人の人からは、漫画はとんでもない、子どもに害があってなんの得にもならないと見られています。ところがその本

人たちが子どもの頃、皆一生懸命漫画を読んでいました。私自身もそうでした。漫画を本当に一生懸命読んでいました。娘が、今年高校受験ですが、漫画ばかり読んでいます。私の商売がら仕方ないですが、私の父親は漫画の仕事をしているのだから、私が漫画を読んでも文句を言うわけない、私はといえば外に行っては、漫画の素晴らしさを言っているわけですから、漫画を読んでいても、何にも言えないはずだと、私のことをなめてかかっています。私は1人娘で、私が40歳の時の少し遅い子どもでしたから、なめるように育てまして、娘からなめられています。

漫画は、小説とか、絵画とか、音楽とか、他の芸術と比べますと、文化として認知されていなかったのです。特に、私はこの間、新聞の漫画関係の戦後の記事を集めてみました。その中にもありましたけれども、私は最初は冗談かなと思ったのですが、1960年代に、ある小学校が生徒全員に家にある漫画全部、校庭に持ってこさせて焼いたのです。まさに焚書坑儒ではないですけども、こんな時代がありました。ある時子どもが机の上から飛び降りて足を怪我しました。「鉄腕アトム」が好きで、アトムのように飛べるものだと思って飛び降りたら、だめだったのです。因果関係が本当に成立するかしないかわからないにもかかわらず、漫画はだめ、アニメーションもくだらないもの、ということが浸透していました。手塚治虫は、漫画は素晴らしい表現媒体であることを、誰よりも早く、本当に的確に本質を捉えてわかっていたと思います。ですから一生懸命、漫画の素晴らしいことを、必死になって叫びたかったのです。週刊誌3本もやっていて、忙しくてしょうがないのに、テレビで漫画の特集をやれば、必ず手塚のところに「出てください」ときます。そこへ行けば、仕事ができないわけですから、私たちは断りたくてしょうがないのです。何とか断ろうとするけれども、手塚は絶対に「私が行きます」と言います。クイズ番組に出るわけではないですけども、もっとも一度出たことがあります。漫画やアニメの話ならば必ず、誰をさておいても行きました。もちろん、たくさん優秀な方が次世代にいますけれども、やはり自分がというか、論客としても手塚治虫はものすごいものがありましたし、自分が出ないとだめだという使命感を持っていたのだと思います。

漫画のことはもちろん、漫画を認知させるためには、一生懸命やってきました。手塚プロも最近、年に1回ずつ4、5年続けて、アメリカの有名な漫画家を集めて日米漫画家交流会をやっていますが、先日そこで、

私はアメリカの漫画家の話を聞きました。アメリカでもやはり1960年代くらいにものすごい漫画バッシングがあったらしいのです。そのおかげで芽が摘まれてしまったと、アメリカの漫画家の1人は言っていました。ところがこちらには手塚治虫がいたわけです。手塚治虫はあれがだめなら、これはどうだと、いくらでもアイデアを出します。ぎりぎりの線上をいつも出してきました。ですから「アポロの歌」も、性教育みたいなテーマを出すと、すぐさま槍玉にあがります。今ならば漫画でキスシーンなんか当たり前ですが、そのキスシーンを一番最初に子ども漫画に取り入れたのも、手塚治虫ですが、ちょっと早過ぎて、そこでも槍玉にあげられました。漫画に対する偏見を何とかして取り除きたいという手塚のがんばりがありました。もちろんトキワ荘のグループをはじめ、後続の先生方の努力も大きな力となりました。

手塚が亡くなった時には、かつて漫画批判を結構していた新聞でも漫画を高く評価し、中には、社説で手塚や漫画を取り扱いました。外国人が日本に来ると電車の中で漫画の本を読んでいる、これが異様にうつる、何故日本人はこんなに漫画が好きなのか、外国ではそんな光景はない。その社説の中ではよその国に手塚治虫がいなかったからだと書いています。それほど手塚治虫は漫画の社会認知のために一生懸命やっていました。ただ単に面白い漫画を描いていただけではなくて、そういった方面でも大変活躍しました。今漫画が若干停滞しています。漫画自体は若い人がどんどん出てきてよくなるでしょうが、漫画をこれからもっともって成長させていこうと思うと、手塚治虫がいなくなったことはものすごく大きい気がします。

牧野先生のような、大人漫画の方がいる中でちょっと恐縮ですが、手塚は漫画家でありながら世間と闘ったのがまず第1です。世間とか、学校の先生とか、PTAとかです。それから手塚治虫は子ども漫画でスタートしました。子ども漫画は、大人漫画の世界の漫画家から比べるとやはり区別されていました。大人漫画家とは、新聞で1コマ漫画を描くとか、4コマ漫画の世界の人とか、大人のナンセンス漫画を描いている人とか、昔、文芸春秋が出していた『漫画読本』という月刊誌に描いていた方がたです。そういう人たちはどちらかというと絵描きから入っていった方が多いと聞いております。美術の関係から漫画家になられ、社会風刺を主にテーマとしています。手塚は全然そうではなくて、最近の児童漫画はそうでないと言いきれませんが、そういう人が少ないのです。漫画が好きで好きでし

うがなくて、児童漫画を描いていたわけです。どうしても児童漫画の世界は子ども対象であるということで、大人漫画から一線を画されていました。もっともまさしく子どもだましのものもありましたが。漫画集団は、大人漫画の世界の漫画家の集団です。横山隆一、近藤日出造、杉浦幸雄の各先生をはじめ、多くの大変な才能を持った漫画の先生方のグループです。そこに手塚治虫が入れたのです。これは手塚治虫が普通の子ども、児童漫画の描き手とちょっと違うことが認められたのです。その後、トキワ荘のグループをはじめその後輩たちが入ってきました。その中で手塚治虫は、別に中心ということではないのですけれども、そういう世界の間に立っていました。手塚治虫が亡くなったことは、漫画界全体を見ると、やはり別の意味でも損失という気がします。

アニメの世界でも同じです。実験アニメをやっている、あるいはコマーシャルのアニメをやっていたり、純粋なアニメの追求をしている、そういった人たちからすると、テレビアニメなんかアニメではないと考えている人もいます。テレビアニメの世界の人間にしてみれば、アニメ産業の役にも立っていないものばかりつくって、われわれがあるから、今アニメが脚光をあびていると自負を持っています。これも手塚治虫が真ん中にいると結構おさまります。

手塚治虫は1946年に漫画家としてスタートしましたが、今と比べればその時漫画で生計が立てられる人はほとんどいませんでした。子ども漫画家だったら本当にわずかの人間だけです。そんな世界に手塚治虫は飛び込んでいきました。漫画が好きで好きでたまらなかったことはありますが、漫画の表現媒体としての素晴らしさをものすごく認識していたからです。戦時中も戦意高揚に漫画は使われていました。その辺はミュージアムの中にもあると思いますが、漫画とか音楽とかは、よく戦意高揚に使われています。アメリカでもそうです。そのことを手塚はよく知っていて、逆に平和のために漫画の表現能力の素晴らしさを使ったらいと思ったのです。手塚は一生懸命子どもたちのために漫画を描きました。

先ほど社説の話をしましたが、そのあとすぐに東京の国立近代美術館で手塚治虫展が開かれました。宝塚でも、公的な機関、宝塚市立として手塚治虫の記念館、漫画家の記念館ができました。そして、手塚治虫は勲章までいただきました。おそらく天国の手塚は、ここまできたかと喜んでいるかもしれません。

先ほど手塚が遅くなくて早い、でもさんざん編集者

に迷惑をかけたお話をしましたが、20ページの原稿が16ページで雑誌に載ってしまったという話があります。編集者が遅いので締め切りに間に合せる対抗手段として取ったことです。手塚治虫の「ブラック・ジャック」とか「三つ目がとおる」と、表紙にうたってあって、休載になりますと、不当表示になります。本当は表紙を変えて、他の原稿で埋めればいいのですが、それをやることは大変です。表紙は4色の色刷りページですから、先にあがってくるのです。中身は一色のページですから、簡単にあがるわけです。大体4倍の日にかかります。1週間で白黒ページができるとすれば、4週間前に色ページはできていなければいけないのです。百万部、二百万部と、もう刷りがあがっています。ですからどうしても原稿を入れなくてはならないわけです。けれども原稿をずっと待っていると落ちてしまう。では16ページで持っていこうかと。そこである時、青年誌の編集者が20ページのところ、16ページ分だけを持って行ってしまったのです。その時の16ページだけを読んでも、たいして面白くないまま終わってしまいます。残り4ページ分は、会社の広告か、ストックの記事や原稿を入れて、埋め合わせをしたことがありました。それからそんなことをされないために、手塚は後ろから、20ページから描き始めたことがあります。そうすると編集者が途中で持っていきようがなくなるので、がっくりします。1から4ページまで描くと、次は20、19、18ページと描いたりしました。手塚は最後まで待たなくてはいけなくなるように、編集者に対抗する手段としてそんなことをやりました。

私がマネージャーでいる時にいつもそこに編集者が待っているわけです。またアニメの部署のプロデューサーも待っています。そのような状態で必ず順番が問題になります。「お前のところは発売日はいつだ、俺の方が早いだろ、俺の方を先にしろ。お前のところは部数が少ないから、俺のほうで刷る時間がたくさんかかるから」とかで、けんかが起きます。收拾がつかなくなると、手塚治虫は「わかりました、じゃあみんな平行にして描きます」と言います。これが一番非能率的ですが、1ページずつ描き始めるのです。たとえば学年雑誌の子ども漫画、「ユニコ」なら「ユニコ」を描いて、ここで『ビックコミック』を描いて、次に週刊誌の「三つ目がとおる」を描き始めて、1ページずつ描くわけです。これはものすごい頭だと思います。それぞれ大人のものであり、少年のものであり、子どものものであり、幼児のものであり、それを1ページずつ頭を切り替えながら描きます。

付き合い始めて10年ぐらいたった時、私は初めて、手塚が「アイディアがないのです」と言うのを聞きました。それまでは手塚は機械的に1つの雑誌が終わったら次の雑誌、1つの雑誌が完全に終わらないうちに、いつも次の作品のページが出てきます。それぐらい頭が回転していてアイディアなんて何処から湧いてくるものと思っていました。

私は漫画の雑誌の編集をやっていて、ある漫画家の担当をしていたことがありました。親近感から悪口を少し言いますが、もう亡くなってしまったのですが、彼の担当をやっている時には、毎週週刊誌をやたら私は読んで、ネタになりそうなものを持ってきます。彼が「今週はアイディアがない」と言うと、「こんなことあったよ。あんなことあったよ」といろいろ話します。必死になって彼はアイディアを練って、天才的な作品を仕上げます。手塚治虫に限っていえば、誰のアイディアも何も聞かないで、自然に1作品終わりそうだなと思うと、次の作品がもう出てきます。

初めてアイディアがないと手塚が言ったのは、「ブラック・ジャック」です。全部病氣を使い切ってしまったというのです。私たちは途方にくれまして、翌朝には原稿を入れなくてはいけない雑誌でしたが、夜の8時ごろまた先ほどの恐い編集長に電話で「アイディアが出なくて困っています」と言うと、その編集長が「ばかやろ、寝かせろ、もう寝ちまえ」とか「そんな原稿いるか」と言ってガチャンといつものように電話を切られました。その場に編集者がいるので、手塚に「ちょっとお休みになったらいかがですか」という優しい言葉はかけられません。すったもんだしていると手塚は寝てしまい、2時間ほどするとバリバリ描き始めました。ただ単に眠かっただけでした。「アイディアがない」とか、なんだかんだ言えば寝る理由になると手塚は思ったのです。われわれにしてみると、あの編集者もそうですが、その時初めてアイディアに困った手塚を見ました。本当かどうか怪しいものですが。

手塚が亡くなるちょっと前にNHKの番組で、「創作の秘密」という特番がありました。ビデオにもなっていると思います。そこで「アイディアはバーゲンセールをするほどあるのだ」という話をしていました。たしかに本当にあります。何でも描きたがります。手塚の作品を分析してみるとまず描いていない分野はないぐらいです。たとえば時代物もあり、未来ものもあります。文学、ゲーテの原作もモチーフに描いていたし、ホラー、動物、ありとあらゆる分野を、ほとんど網羅しています。それでもまだ描きたがりました。

新しい雑誌社から注文がきて、他の編集者がそばで聞いていて、私が相手と電話をしている時、「断っちゃえ」とメモで書いて渡されたこともありました。私が勝手に断る時もありました。断わると、翌朝になって手塚がそっと来て、「実は家のほうに何々出版から電話がきたのです」と言うのです。しかし、家に電話がいくはずがないので、おかしいと思って話していると、ちゃんと夜中に来て私のノートを全部探って読んでいるのです。結局そういう雑誌もやることになりましたが、それぐらい描きたくて描きたくてしょうがなかったのです。

何でも描きたいので、仕事量がふえ当然入稿が遅くなります。他にも理由はあります。いい加減なところで割り切って、人にまかせれば楽なのにそれをやらないからです。それだけ読者に対して、真摯な態度で臨んでいました。子どものための本ならば、なおさら必死になって創っていました。そんなことから編集者はいららしていました。スタジオに安普請の柱がありますが、そこはコンクリートの柱の外側にベニヤが貼ってあったのですが、みんな腹が立って蹴飛ばしたりするので、いつも穴ぼこだらけでした。

そんな状況の中で、取材があったり、海外へもよく行きました。手塚は海外の人たちや文化をものすごく大事にして、国際交流も大切にしていました。それ以外でも、どうしてもイースター島が見たい、というようなこともありました。イースター島はものすごく遠いのです。今は楽になったのかもしれませんが、当時はまずロサンゼルスに飛んで、チリへ行って、チリからイースター島へ行くのです。そんなとんとんと行けるわけではないので、ロサンゼルスまで行ったら 2、3 日待って、1 週間に 1、2 便しかない飛行機に乗り継いでチリまで行くのです。そんなところに行くには、最低 2 週間分 3 週間分描きためていなくてはならないのです。これが何日だ、これが何日だと、大きなスケジュール表を自分で作ります。編集者がみれば一目瞭然、「こんなことできるわけがないよ」と言われます。本人は絶対に行くつもりでやるのですが、結局旅立てたのは、行こうと言ってから 3 回日程をかえてからでした。

それでもようやく行けた時には、何本か原稿を持っていきました。ロサンゼルスへ行くとき乗り継ぎに 3 日間待ちます。チリまで行くときどうしようもないのですが、当時ロサンゼルスから日本に帰るパイロットやスチュワーデスさんに、この原稿を持って行って下さいと頼むわけです。われわれは羽田だったか、成田だった

かへ行って待っています。飛行機が着くとパイロットやスタッフの方から原稿をもらいます。そんなことができなくなると、普通の航空便でこの便に乗せたという連絡があります。そうすると夜中、というか 6 時過ぎに着くのですが、税関へ行って、その日の業務は終わっていますから、緊急通関願を出して、所長に持っていくます。「どうしても今日中に出さなくてははいけないものがあるのです」「生ものですか?」「いや生ものではない」「ようするにペットですか」「ペットでもないのですけれども。原稿なのです。今日やらなくてははいけないのです。明日の朝では間に合わないのです」手塚が描いた原稿に少しアシスタントが手を入れないと、完成しません。そのためにどうしても時間が欲しいのです。手塚治虫の話をしました。そういう噂は聞いてますということで、緊急通関願に判を押してもらえました。そんなことをしてまでよく海外へ行きました。

「創作の秘密」のNHKのビデオを見ていただくとよくわかりますが、手塚が海外へ行ったら、これで解放されたと、マネージャーがものすごくほっとするのです。日仏文化サミットに出るために、奥さんを連れてパリへ行く時に、うちのマネージャーがいつもは渋面ばかりしているのに、解放感に浸って、にこにこしながら写っています。解放感に浸っていると、大変なことになったこともあります。ようやくイースター島へ向けて出発した時です。私と手塚の運転手を送っていったのです。運転手も手塚とは随分古くからの長い付き合いでした。気が変わるといけないから、飛行機が飛び立つまで見ていようと、飛行機が飛び立つのが見えるレストランでずっと見ていて、「飛んだ飛んだ」と高田の馬場へ戻ってきました。そこへ電話がかかってきて、チーフアシスタントが取って、もしもというわけですが、途中でガチャンと切れたのです。「先生から電話きたよ」と言われて、「そんなはずないよ」と言いましたが、やはり手塚でした。あとで聞いてみたら、エンジントラブルで戻ってきたのです。「しばらく時間がかかるので、時間がもったいないから、会社へ戻って仕事をする」と言ったらしいのです。付き添いで一緒にイースター島へ行く人が、その人も偉い児童文学者ですけれども、何回もキャンセルしてようやく行けたのに、またエンジントラブルで戻ってしまいました。里心がつくといけなから、隣でガチャンと切ったそうです。そんなことで無事に行きましたが、ともかく編集者を困らせました。

アニメーションも同じ状況になりますが、少し漫画

と異なります。というのは漫画はすべて自分1人で描きますけれども、アニメーションの場合は1人でできる作業ではないのです。原画マンや動画マン、仕上げまで、いろいろな人が携わってやるわけです。テレビシリーズは1週間に1本ずつあげなくてはいけないのです。手塚は最初基本的なところを説明します。例えばアトムだったら原作がありますが、「原作のこれを使ってください」あるいは「ここはオリジナルにしてください」と、基本の設定だけはやります。それで、動き始めます。もちろん全部チェックします。シナリオがあがったらチェックし、絵コンテがあがったらチェックします。そういう段取りをふんで、やっているにもかかわらず、手塚が雑誌が切れ目で、ちょっと時間ができて、アニメの部屋へ行って、「これを変えてください」と平気で言います。振り出しに戻るような変更なのです。しかたなしに、またやり直しをするような、すごく無駄なことが起きます。

ある時美術の監督と打ち合わせをしている時、そこにテープレコーダーを隠して置きました。手塚の意見が変わることもあります。手塚の子飼いのアニメーターですと緊張しすぎて、美術監督も直立不動みたいな形で打ち合わせをしています。終わった途端に、手塚がいなくなると、「先生なんて言ってた？」と聞くのです。私は客観的に聞いているから適当にわかりませんが、それぐらい緊張して聞くものですから、テープレコーダーを後で聞こうと置いたのです。その段取りも順調に進んできて、もうほとんどあがりそうだった時に、手塚がまた、「これはなんですか、このボードは」と言い出します。「先生がこういう風に言ったのでこう描いたのです」と最初は説明します。「いやぜんぜん違います。こんなことを言った覚えはありません」と手塚は言います。かつて昔の話ですが、制作の人間がテープをもってきて、聞かすのです。確かにそのように言っています。手塚は「これは僕の声ではありません」と言います。時間のない中で打ち合わせをしていますから、時として間違いも起こります。また明日時間ができるから、その時またという一時しのぎの思いか、あるいはその後時間が取れなかったり、時には実際思いが変わったりもしたのでしょうが、決して妥協しません。手塚はそのくらい作品に対して、貪欲な制作姿勢を持っていました。それがひいては結果的に、作品に普遍性がもたらされることになります。40年も前に作られた「鉄腕アトム」や劇場用作品が今見ても新鮮に感じられるのは、執念が結果に表れている気がします。

手塚は1989年の2月9日に亡くなったのですが、その3週間前まで仕事をしていました。もう最後の時にはほとんど意識が朦朧としている中で、「どうか仕事をさせてくれ」というのが、手塚の最後の言葉です。痩せこけてどうしようもないのに、必死になって起き上がろうとします。奥さんが一生懸命「もういいんですよ」と言って、寝かせようとしています。必死になって起き上がろうという、本当にすさまじい執念でした。これは漫画が好きだったからなどということだけではなくて、手塚が仕事をしたいという根本的なところに、もっと理由があったと思います。それはまさに平和なことであり、未来の子どもたちのためであり、自分はどうしてもやらなくてはいけない、自分のメッセージを伝えなくてはいけないという使命感があった気がします。TVアニメシリーズの最後の作品の1つである「聖書物語」について、先ほどお話しましたが、ベッドに入ってそれを見るために、「病室にスクリーンを張ってくれ」と言い出しました。ラッシュといいまして、これから音を付けたり、セリフを入れたりする前の映像だけのフィルムがありますが、「ここでラッシュを映せばチェックできるからそうしてくれませんか」と言います。病院側は説得できるけれども、奥さんがいるのに、ガンの宣告を受けている状況の中で、そんなこと、とても私にはできません。本人にはガンであることは隠していました。なんとかうまく締め切りを延ばすとか、あるいは、チェックをきちっとしますから、それに病院側にも迷惑がかかるので、というようなことで、手塚に納得してもらいました。そのくらい仕事に対して執着心がありました。

先ほどお話しましたが、漫画界は少し騒りが見えています。それは別に手塚治虫が亡くなったからではないと思いますけれども、今まではずっと右肩あがり、漫画が伸びてきたわけです。手塚治虫がいて、トキワ荘グループがいて、永井豪、本宮ひろ志先生他、女性の漫画家もふくめ、たくさんの綺羅星の様な漫画家がいたからです。今の若い人たちは、1作品でともうそれっきりになってしまう人もいます。だれでも1作は描けます。小説であろうと、絵画であろうと、音楽であろうと、漫画であろうと誰でも自分の思いをあらわしたけぶつけた1作目はできます。ところが連続して新しい作品を生み出すのがプロですが、そういうことができなくなってきています。漫画の場合、週刊誌で1作当たると大体何億かの収入になります。それが単行本になって、印税が入って、それから映画化、テレビ化となります。特にテレビ化となると、キャラクタ

一商品といいまして、われわれはマーチャンダイジングというのですが、Tシャツにそのキャラクターをつけたりすることですが、こうして、1 作品が週刊誌で売れると億万長者になります。それだけで、もてはやされてテレビにも出たりもします。今の若い人たちは、いろいろな仕事をしたりします。職業として確立していなかった時代に漫画家を目指した手塚治虫や古くからの人たちは一生懸命漫画を認知させようと血みどろの闘いをやってきたわけです。いまは漫画家は大変な職業になっています。それに映画やゲームの職業としてのボーダーラインが非常に低くもなっていますし、とりえず漫画でもという気に入ってきた人も少なく、たまたま 1 作当たったという感じでいる人もいます。

なおかつ漫画は、平面の二次元の中ですから、表現は手塚治虫などがみんなやってしまっていて、もう新しい表現方法はないと思っているのか、独創的なものが少なくなってきました。もしここに手塚治虫がいたら決してそうではないと思います。いろいろなことをやりつくして、白いところが全部真っ黒になったら、また別の色が使えます。それは真っ白と一緒なので、いくらでも方法があるではないか、むしろやり尽くしたほうがそこに新しいアイデアが出てくるという風に手塚は言っていました。迫力のある漫画家が昔ほどなかなか出てきません。是非そのような漫画家が出て欲しいと思います。手塚はご存知のように医者です。戦争後すぐですから医者と漫画家と比べたらどちらを取るか、誰が見ても医者を取った方が、職業としても社会的にもいいのですが、それをあえて漫画を選んだのです。それはもちろん本人にものすごい自負もありましたし、自信もあったのでしょう。漫画家の道を選んで、辛い道を乗り越えてきました。その結果今漫画がそれこそ、大学においてもマンガ学科ができあがるような状況まで来しました。そこで一生懸命漫画をならって、漫画家になるのもいいですが、是非その先達の、今までの人たちがこれだけの漫画世界を築いたのだという意識を持って欲しいと思います。俺たちはこのあと、どれだけのものを築くのか、これは別に漫画の世界だけではなくて、どこの世界でもいえることだと思います。もしここに在る若い方たちで漫画家を目指す人がいるのであれば、是非将来の自分の後輩たちにもちゃんとした道筋をつけていただきたい気がします。

手塚は、晩年は特に国際交流、漫画を通じての国際交流、アニメを通じての国際交流をしきりにおこないました。漫画で表現することは限界があります。どこ

の国でも出版できるわけでないし、15 年位前まではなかなか海外出版することは難しかったのです。もちろん手塚への注文や特定の漫画家にはあったのですけれども。日本の場合は右から左に読むわけですが、西洋やアメリカではほとんどが左から右で左起しの本です。ですから、翻訳の問題だけでなく、手を入れなければならないことがたくさんあります。簡単に解決できないのです。一番手っ取り早い方法は、逆製版で、鏡に写した形にするのです。ところがその製版が当時すぐくまなく、線が汚くでるのです。また、多くの漫画は吹き出しの中が全部写植という別の印刷物でできています。アメリカでは吹き出しの中は書き文字なのです。書き文字にすればいいのですが、日本文字ですと、縦に長くても、横に長くても大丈夫です。しかし英文ですと、その吹き出しの中にセリフが上手に入らない場合もあります。擬音の場合も困ります。ギャーとか描き文字で書かれているものです。擬音は絵の一部ですから、どうしても描き直さなければなりません。その部分を消して、それを英語にするわけです。自動車がスタートする時はブルルンとか、バラララとか、英語に書き直します。書き直すにしても縦にあるのを横にしないといけない場合は、そこに絵を足さないといけないのです。一番手っ取り早い方法は全面的に相手にまかすことです。「おまかせしますよ」と言うように簡単にできてしまいます。しかし、それでは手塚は決して了解しません。ひどいものになるのが見えていますから。

手塚は「私が全部描き直しますから、翻訳だけしといてください」と言っていました。そんな時間が手塚にあるはずがありません。結局、手塚が活着している間には、手塚の翻訳本は一冊も出ませんでした。もちろん勝手な海賊版は出ました。中国ではストーリー漫画のようなものを連環画といって、文庫本の半分くらいの大きさで出ていますが、それが、やはり左起しです。アトムなどが出版されましたが、逆製版でないので、一番最初に、右のコマから左のコマに進むというように、わざわざ読み方が書いてあります。このようなかたちで海賊版も出ていましたが、海外で手塚の漫画は正式には出版されませんでした。今は印刷技術がよくなっているので、多くの日本の漫画が海外で出版されています。手塚の作品もそうです。それから日本の漫画は世界中で MANGA と呼ばれています。なぜかといいますと英語では comics だとか cartoon だとかいう単語がありますが、日本の漫画は comics とか cartoon では表現できないのです。日本の漫画は MANGA とし

てしか表現できないほど、日本の漫画は独特のもので素晴らしいという評価を受けています。

アニメも同じです。ジャパニーズアニメーションフィルムですけれども、縮小してジャパニメと言われていました。アニメという言葉はありませんが、今や、アニメといったら日本のアニメーションのことになるほどです。それほど日本のアニメや漫画は海外に通用するようになりました。一番最初に海外との交流を積極的にしたのは手塚治虫です。サンディエゴでコミックコンベンションというかなり大きなコミックのイベントがあるのですが、それも早くから手塚は行きました。フランスのアングレームで、フランス政府の高官も出席するような漫画のイベントがあるのですが、それも最初に行ったのは手塚です。ある時、出版社の人たちに「面白いから、ゆくゆく商売になるから行きなさい。文化的な交流にもなるから行きましょうよ」と誘ったのです。その当時、ある出版社の人は、「そんなものに行ったら仕事になりませんよ」と言っていました。それを言い始めてから5、6年たってから、みんなが行くようになって、今のように、日本は漫画の輸出国、あるいはアニメの輸出国になってきた、というような状態です。

私は絵が描けません。【ホワイトボードを指して】これは牧野先生用にとってあるのですけれども、手塚は、「漫画は世界のエスペラントになりうる」とか、「漫画記号論」とか、よく言っていました。「学校の先生はとにかく漫画を描けるようになりなさい。学校で授業を単に言葉で教えていたのではだめです。漫画を描きながらやれば、子どもたちが振り向いてくれます。世の中のお父さん、お母さんも漫画を描きなさい。似顔絵でも描いてあげなさい。相手が笑おうと、なにをしよう、いいじゃないですか。笑ってくれば、それだけで親近感が増したということです。漫画を描けるようになってください」と、手塚は学校の先生によく言っていました。もう1つ、子ども漫画家は小学校の先生と一緒にということです。小学校の先生は1年生から6年生までいろいろと担当します。6年生までいくと日本の子どもは、児童漫画をほとんど卒業してしまいます。ちょうど幸いに青年誌ができた、大人誌ができたので、そこへどんどん移っていきました。だけれども子ども漫画家は学校の先生と一緒にです。6年生までいったらまた1年生の担当に戻らなければいけないと、手塚自身も必死になって、子ども漫画を描かなければだめだと言っていました。

ちょっと話がずれますけれども、ある時、手塚が子

ども漫画をぜんぜん描かなくなった時期があります。『少年チャンピオン』に描いていた「ブラック・ジャック」が終わった頃です。大人漫画の『ビックコミック』とか、少し違った雑誌や『週刊文春』に描き始めましたが、子ども漫画が描けない時に、ものすごい不満が手塚にはあったのです。「大人はもういいんです、子ども漫画を描かなくてはだめだ。子どもにメッセージを送らなければだめなんです」と手塚は言っていました。他の連載もあり、決して時間のゆとりがある状態ではないのですが、われわれも少年誌になんとか描かせるようにしなければいけないと思ったのです。これ以上苦勞したくないなと私たちは思っていたのですが。その当時私の兄が、兄は10歳上ですから1934年生まれですが、「最近手塚さんはがんばっているじゃないか」と言います。それほどがんばっていないのに、何を言うのだと私は思いましたが、かれらは文春に載っているだけで、がんばっていると思ってしまうのです。少年誌なんか読みません。私たちや手塚にとってみたら『少年マガジン』や『少年チャンピオン』に載っていないことは一番危機的な状況だと思っているにもかかわらず、文春に単に描いてるだけで、大人はがんばっている、いい作品を描いていると思うわけです。確かに文春の「アドルフに告ぐ」は大変な傑作ですけども、基本的に意識が違うのです。

漫画記号論は、漫画がエスペラント語になりうるということです。特にアニメーションは言葉がまったくなくても、すべてわかります。これは知っている人が見たら当然と思われるのですが、あえて知らない人もいでしょうから、ご説明します。こういうまるがあります。【○を描く】これはただ単にまるですが、ここにこう点を2つ描くだけで世界中どこにいてもこれは人の顔だと、だいたい判断します。ここに眉毛を斜めに下げて描くだけで情けない顔になります。逆につりあげれば怒った顔になります。口もそうです。こういうふうに描けば笑った顔です。こんなことでエスペラント語になりうるという話を手塚はしたのではなくて、もっともっと深い意味があったと思います。手塚であればもっと上手に説明できたのですが。

実は、手塚の展覧会をこの間、中国の北京でやりました。「三毛」という有名な漫画の作者、張楽平さんという中国では大変な漫画家との二人展です。もちろん日本の漫画家と全然違うタイプの児童漫画を描いています。彼の作品の1つにこんなものがありました。ある男の子がナイフで木を削っていて指を怪我します。泣いて家へ帰ったら、お母さんが優しくなだめて

くれて、包帯をしてくれます。その包帯をしてまた勢いよく外へ飛び出してさっき傷つけた木のところへ行くと、それをじっと見て、子どもが木に包帯を巻いてあげるといだけの漫画で、たしか4～6コマだったと思います。字も何もないのですが、作者の意図は伝わってきます。漫画はどこでもどんな国の人でも、それだけで共通認識ができるのです。

最後に、手塚の書いたものからいくつか言葉をお伝えして、私の話を終えたいと思います。手塚治虫の『ガラスの地球を救え』という本があります。これは手塚が講演したりエッセイを書いたりしたものをまとめた本です。その中から、いい言葉だと思うものを拾い上げるかたちで、まとめたものがこれです。これはぎっしりと20ページぐらいあるのです。そこで「ブラック・ジャック」は20何巻あるから、あの中から、たくさん言葉が出てきて、いいせりふがいっぱいあるのではないかと、「ブラック・ジャック」全巻を読む作業をしてもらいました。「ブラック・ジャック」の中から出てきたのは、3ページから4ページだけです。そんなバカなと私は思いました。『ガラスの地球を救え』は200ページほどの文章ですが1巻だけ、「ブラック・ジャック」は200ページほどで20巻以上もあるのです。私たちは知らないうちにコマとコマの間あるいは絵の表情によって、勝手に自分で言葉として心に刻んでいたわけです。それが漫画です。これは文章です。言葉です。私がいくら言葉で訴えても、百聞は一見にしかず、とはよくいったもので、それだけ漫画の表現能力があります。今さまざま、たくさんの漫画雑誌がありますが、漫画のよさがどこかに置き去られている気がちょっといたします。

手塚の言葉を紹介します。環境問題にちょっと関係しますけれども。

恐竜は一億数千万年も地球上で繁栄した王者だったにもかかわらず、なぜか六千五百万年前に絶滅してしまった。

人類など地球上に現れてから、まだ三百万年ではないのに、はやくも人類自身ばかりか、地球上の全生命体滅亡か存続かの鍵を握っている。

(中略)

ひょっとするとこれまでもいまも人類はまだ野蠻時代なのかもしれないと思うことがあります。たとえ月着陸を果たし、宇宙ステーション建造がどんなに進もうと、環境汚染や戦争をやめない限り、“野蠻人”というほかないのではないでしょ

うか。

なんとしてでも、地球を死の惑星にしたくない。未来に向かって、地球上のすべての生物との共存をめざし、むしろこれからが、人類のほんとうの“あけぼの”なのかもしれないと思うのです。

それからもう1つ、手塚が、自分のアイディアがどうしてそんなに出てくるのかという質問に答えた時ですが、「もしもと考えれば何でもできる。今状況が悪ければ悪いことを全部想像しなさい。そこから新しいものが出てくる。あるいは、明るいものが見い出せるのではないか」と言っています。そうした中で、

「もしも、あなたの命があと1年なら—」

いったいあなたは何ををするのでしょうか。

「もしも、あなたの子どもの命があと1年なら—」

いったい、あなたは子どもに何をさせてやりたいのでしょうか。

子どもをお持ちの方はお子さんに受験勉強をさせますか、考えさせられる言葉です。若い人たちは昨日の1日でよかったのか、今日も昨日と同じでいいのか、もう1日しかないとしたらどんな生き方をするのかということを一生懸命考えることが、とても必要ではないでしょうか。

私たち手塚プロダクションは、もう手塚がいないわけで、手塚が何かを生み出すということはありません。ですが私たちはこの手塚の何分の1かの才能しかありませんが、せめて手塚が漫画とアニメに注いだ情熱に負けないよう、情熱を持って、ものを創っていきたいと思います。数か月前ですけれども、ニュースで、花が心に与える影響を数値で示すという実験が出ていました。花が心を癒すことは確かです。数m離れた1輪の花を人が見ますと、数値が出るわけです。心が和んだ、暖まった。それをかなりたくさんの花にした。そうすると数値があがった。今度はうんと近づけてその花束を見せたら、また数値があがった。今度は花束を持って、その人に花束を手渡した。また大変、数値があがった。私たちはなかなか情熱を持っていても、いつも良い作品が創れるわけではありませんが、せめていつも花束を子どもたちに手渡しするつもりで、ものを創っていききたいという気持ちでおります。今後とも手塚プロを手塚治虫とともどもよろしく願いいたします。ありがとうございました。